HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	研究会報告
Author(s)	石山, 徳子; 田辺, 陽子; マオアテ, ポール; Roslynn, Ang; 西山, 教行; ムーア, ダニエル
Citation	145-163 多文化世界におけるアイデンティティと文化的アイコン : 民族・言語・国民を中心に Identity and Cultural Icons in a Multicultural World : Ethnicity, language, nation
Issue Date	2020-03-31
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/77221
Type	other
File Information	9.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北海道大学メディア・コミュニケーション研究院　多元文化教育論分野　院内共同研究
「多文化世界におけるアイデンティティと文化的アイコン：民族・言語・国民を中心に」

公開研究会
2017 年度
第 1 回（2017.11.10）
「セトラー・コロニアリズムの地理空間」ーアメリカ先住民の身体と環境をめぐる諸問題ー
講師：石山徳子（明治大学政治経済学部）
コメンテーター：秋辺日出男（阿寒アイヌ工芸協同組合専務理事・阿寒観光協会理事）
八重樫志仁（ウワカアウンクル）

報告　石山徳子
本報告の目的は、アメリカ合衆国（以下、アメリカ）をセトラー・コロニアリズムの地理空間として捉える視座を提示した上で、特に先住民族の身体と環境をめぐる抑圧構造について検討することにあった。具体的には、スポーツ界で注目される先住民のマスコット問題、及び、核開発の現場であるワシントン州のハンフォード・サイトにおける環境正義問題を事例に、不可視化の暴力、ステレオタイプの再生産、そしてセトラー・コロニアリズムに支配された国家における先住民族の生き残りをかけた営みについて報告した。

まず、議論の基軸となるセトラー・コロニアリズムの概念について説明した。この概念については、2000 年代以降、特に先住民研究、エスニック研究、歴史学の分野で活発な議論がなされてきた。入植者植民地主義、もしくは定住型植民地主義と訳される理論的枠組みであるが、先住民族がたどってきた歴史経験の分析だけでなく､アメリカという国家そのものの在り方や、その社会、文化、思想について理解するためにも有効である。セトラー・コロニアリズム研究は、入植者たちが移住先の土地に留まり、新しい国家を設立し、発展を遂げる過程において、先住人口の排除や不可視化が戦略的に必須であったことをあきらかにしてきた。

セトラー・コロニアリズムの歴史的文脈において、アメリカ先住民族は、侵略戦争による大量虐殺と暴力を経験した。また、入植者たちは、先住民には免疫のないインフルエンザや麻疹などの疾病を持ち込み、これにより多くの先住民が命を失った。西部に移住すれば、自由に使える新天地が存在し、これを耕し、定住し､「文明化」を進めることこそが神に与えられた「明白な運命」であるという思想のもと、入植者たちは先住民族を僻地へと追いやり、土地の収奪を続けた。18 世紀末以降に施行された同化政策等を通じた文化的ジェノサイドもまた、先住民族には大きな打撃を与えた。このような動きを根幹から支えたセトラー・コロニアリズムの思想は、現在至るまで、社会的な影響を与え続けている。

スポーツ界で受け入れられ続けてきた先住民のマスコットは、羽飾りをつけ、ときの声を挙げながら闘いにのぞむ､入植者たちが構築した彼らにまつわる獰猛なイメージに基づいている。メジャー・リーグやアメリカン・フットボールをはじめとするプロフェッショナル・スポーツ

から、大学や高校のスポーツに至る多くの場面で、先住民マスコットは濫用されてきた。本報告では、これに異議申し立てを行ってきた、先住民アーティスト、グレッグ・ディールの活動などを紹介した。ディールによるアートは、セトラー・コロニアリズムに支配されたアメリカで、既に滅びた存在、もしくは不可視化される対象としてではなく、今現在を生きる先住民族の怒り、悲しみ、そして希望を紡ぐ営みのひとつである。

次に、第二次世界大戦中のマンハッタン計画の拠点のひとつで、プルトニウム生産の拠点となったハンフォード・サイトに展開する環境正義、環境人種差別の事例を紹介した。甚大な環境リスクを伴う核開発においては、切り捨て可能な空間、そして身体が不可欠である。したがって、セトラー・コロニアリズムの歴史空間を内包するアメリカが、核開発の最先端を走ってきたのは決して偶然ではない。ハンフォード・サイト周辺の先住民族が直面してきた困難、異議申し立ての試みについて、現地調査をもとにした報告を行った。

第２回 (2018.2.23)

「古写真に見るアイヌ民族の表象」―函館アイヌ学校とセントルイス万博博覧会を事例として―

田辺陽子（University College London)

報告　田辺陽子

本研究発表では、1904年のセントルイス万国博覧会及び英国聖公会宣教協会のアーカイブズ資料を通して、19世紀後半から20世紀初頭におけるアイヌ民族に対する言説と表象について考察を行った。当時の米国では、アイヌは「謎に包まれた民族」(New York Tribune Illustrated Supplement, January 10, 1904, p.8)」と考えられており、シカゴ大学准教授フレデリック・スターのように「アイヌ白人説」を唱える学者も存在していた（Starr, 1904）。そうした中、現地からの強い要請により、日本から幼児を含む9名のアイヌ代表（「アイヌ・グループ」）がセントルイス万国博覧会に参加するため渡米することになった。約8か月に及ぶ滞在中、彼らは人類学部の敷地内に建てたアイヌの伝統的なチセ（家）に暮らし、日々の生活を来場者に「見せる」という野外展示企画に参加した。この展示手法は、当時趨勢であった社会進化論、そして帝国主義的な「支配・被支配」構造に基づく差別的なものであり、野外展示に参加した世界各地の先住民族の人々に対して、来場者はあからさまに好奇な視線を投げかけたことが記されている（稲垣, 2016）。アイヌの参加者は中でも大きな注目を集め、到着早々に地元新聞『The St. Louis Republic』は「帝の最も風変わりな臣下(The quaintest subjects of the Mikado)」というタイトルで、伝統的衣装に身を包んだアイヌの参加者を写真付きで紹介している(April 24, 1904. The State Historical Society of Missouri, Newspaper collection) 。

このように、米国におけるアイヌの表象は「先住民族＝未開人」という当時の先入観に基づいて当初は形作られていたが、渡米からしばらくすると「穏やかで礼儀正しいアイヌ像」が一般的に広まっていく。「アイヌ・グループ」の通訳であった稲垣陽一郎（2016）によると、米国

人はアイヌの人々を野蛮で、粗暴で、不潔で、無教養で、笑わないと信じていたが、実際に目にした彼らはその正反対であり、キリスト教徒であったことも幸いして周囲に好意的に受け入れられていったようだ。米国人女性ジャーナリスト、ジェシー・ビールズが残したある写真には、「聖画を思い起こさせるアイヌの男性」という説明がついており、稲垣の書簡にも、来場した米国人婦人たちがアイヌの男性を「聖書人物の如し」と大声で叫んだとある。こうした事から、アイヌの男性を聖画の人物と重ね合わせ、高貴な存在とみなす人々がいたことがわかる。また、当時の写真（「辺泥五郎アルバム」など）や稲垣の記録を紐解けば、アイヌの参加者が米国人の私宅や修道院を訪問したり、定期的に教会礼拝へ出席するなど、現地の米国人と交流し、新たな関係性を構築していたことがうかがえる。Pratt（1992）は「接触領域（コンタクト・ゾーン）」という概念を用いて、植民地支配の周縁領域における植民地支配者と非植民地支配者といった、非対称な関係性を持つ人々の相互交渉的な接触や変容に着目したが、セントルイス万国博覧会は、まさしく異なる文化背景を持つ人々が出会う「接触領域」であった。宮武（2010）が強調しているように、たとえセントルイス万国博覧会の野外展示企画が「未開」へのまなざしに根差していたとしても、米国人が抱いていた「人種主義」や偏見に基づく（アイヌに対する）幻想や虚構は、その空間で生活するアイヌの参加者の言動や相互交渉により剥がれ落ち、両者の関係はより対等なものに変容していったといえよう。その証拠に、アイヌ・グループの帰国時には「…平生相睦み相親める同情の友人は、続々アイヌ村にも来れり。その多くは最後の会見告別にみやげを齎らし、又ある者は別れを惜み手を握て離さず、その眼に涙ある婦人も多かり、アイヌも亦泣きぬ」（稲垣, 2016, p.210）とあり、友好を結んだ米国人との間に深い友情があったことが示唆されている。このように、アイヌの参加者は単に珍しい被写体、展示対象としてのみ存在していたわけではなく、いわば「民間大使」としてアイヌ民族の精神文化を広める役割も果たしたといえるだろう。

本発表では、続いて「函館アイヌ学校（1893～1905）」に関連する写真史料とアイヌ民族に関する言説についても報告した。明治6（1873）年にキリスト教が解禁されてから、英国聖公会宣教協会（CMS）所属の宣教師たちは困難な状況にあったアイヌの人々に対して伝道活動を行い、ジョン・バチェラーを中心にキリスト教精神に基づく教育・医療活動を北海道内各地で展開した。中でも「函館アイヌ学校」は、聖公会の伝道活動を担うアイヌの若者を育成することを目的とした全寮制の学校であった。当時の英国聖公会におけるアイヌの表象を示す一例としては、1894年にCMSが出版した子供向けの本『A Missionary Alphabet for Little Folk』で、アイヌ民族は「とても奇妙な民族（very strange people）」であり、「興味深い風習に、とても奇妙な宗教」を持つとして、アイヌ女性のシヌエについて写真付きで触れられている。その一方で、英国のCMSアーカイブズには学生服を着た「函館アイヌ学校」の生徒たちの集合写真や英国のスポーツ（ホッケーとサッカー）を行っていることを示す写真が説明書き付きで多数残されている。前述の異教徒に対するCMS側の偏見に満ちた言説を鑑みれば、「函館アイヌ学校」の写真は伝道の成果を見せるための「証明写真」、言い換えれば、キリスト教により「文明化」したアイ

ヌ子弟たちを英国本部に伝える役割も果たしていたと推察できる。こうした写真は、19世期後半に米国に設立された「カーライル・インディアン工業学校」においても、先住民の生徒が同校へ入学する前と後の写真が同化教育の成果の印として多数残されている（Archuleta, Child & Lomawaima, 2000）。当時、北海道内の聖公会の教会は自給からは程遠く、本部からの資金援助に大きく依存していた。したがって、アイヌ民族を対象とした伝道・教育活動に対して、本部からの理解を得るために、学校の運営状況を裏付ける写真資料を送っていたのだろう。アーカイブズに残された「函館アイヌ学校」の写真は、キリスト教により「救われた」アイヌ子弟を表す証でもあったと考えられる。

2018 年度

第 1 回 (2018.7.13)

「先住民・難民に対するまなざしの変化と実際」

講演１　「和解時代」のオーストラリア文学―入植 200 周年以降の先住民表象

一谷智子（西南学院大学）

講演２　On the Front Line of the Migration Crisis: Faith-Based Support for Asylum Seekers in Manchester, UK

Dr. Mark Justin Rainey (University College of London)

第 2 回 (2019. 2.3)

「先住民族エンパワーメントと先住民族政策の変容のための世論形成

―先住民族のイメージ操作と他集団との連携―」

話題１　「カナダ先住民族教育におけるダツ植民地戦略」

広瀬　健一郎（鹿児島純心女子大学）

話題２　「文化実践を通じた民族の誇りの復興」

ナロマ・ライリー（「ナ・ハウ・エ・ファ」代表、東北大学勤務）

ポール・マオアテ（「ナ・ハウ・エ・ファ」メンバー、玉川学園教諭）

報告　ポール・マオアテ (Paul Maoate)

I wanted to talk about how kapahaka or traditional Maori song and dance has been very empowering and inspiring for the Maori people, especially the youth. In the 1980’s full immersion Maori language kindergartens were established as a means of reviving the Maori language. In later years, full immersion primary, middle, and senior high schools were also created. Nowadays a government funded Maori Television channel exists with young reporters communicating in the Maori language, and kapahaka competitions at all age levels are also broadcasted. The most famous element of kapahaka is

the haka, and this most certainly has become an icon of not only the Maori culture, but also New Zealand itself around the world.

第3回 (2019.3.8)
「日本の入植型植民社会を揺らす先住民族：日常と非日常の視点から」

Ang Roslynn (上海ニューヨーク大学)

Presentation Report: Unsettling Everyday Spaces in Settler-Japan

On March 8, 2019, I presented a section of my book project on the politics of seeing and not seeing the Ainu in Hokkaido at Hokkaido University. This research is not on the culture, traditions, and history of the Ainu per se. Rather, I focus on the Ainu as a political category that the Japanese settler state tries to control, delineate and objectify. This is an on-going and processual state project because the Ainu, as the Indigenous inhabitants of Ainu Moshir (Hokkaido, in this case), are a living community with social, cultural and political activities that simultaneously utilizes and exceeds settler-state and institutional containments.

This politics of (not)seeing the Indigenous work to simultaneously re-produce the settler state and eliminate the original occupants of the land. Wolfe argues that settler colonialism, in its positive dimensions, strives to produce and legitimize a new settler society on appropriated native lands. Negatively, it attempts to eliminate the Indigenous occupants of the appropriated land (2006, 388). I apply this definition to the politics of not seeing the Ainu, in which the presence of the Ainu is erased in everyday, urban and central spaces to normalize the presence of majority settler Wajin (ethnic Japanese). Without visible symbols of their culture, members of the Ainu community are invisible but exist and live in everyday spaces within urban Sapporo. The politics of seeing the Ainu is limited to the confines of peripheral spaces, in which they are perceived as an objectified and fetishized spectacle within museums and tourist sites away from the city center. Here, they are highly visible in their adornment of visible cultural symbols and are expected to be seen because these museums and stages are designated spaces to view them. However, the politics of recognition (Povinelli 2002) works to delineate them in a fixed, primordial representation that does not reflect their lived realities and the fluid dynamism of their living culture. In short, the politics of *not seeing* the Ainu eliminate their presence from everyday spaces while the politics of *seeing* the Ainu in peripheral spaces eliminate the resilience and contemporaneity of their society and culture.

In her fieldwork with her community, Simpson explains ethnographic refusal as the Kahnawake Mohawk people's deliberate act of refusal to define a fixed definition of belonging and recognition (2007). To be represented and recognized as either within or outside the Mohawk nationhood requires them to re-use the language of Empire and colonialism. For Simpson, an ethnographic limit is reached when the language of differentiation and knowledge production can potentially reinforce the fixity of a racial, social

and cultural category.

While Simpson's ethnographic limit is a refusal to define, I argue that intimate camouflage is an active process to refuse definition while producing the contemporary Ainu community. Based upon my ethnography with the Ainu community living in urban Sapporo, I argue that *intimate camouflage* is a strategy utilized by some Ainu to *refuse* the politics of seeing the Ainu as unchanging and fetishized. During my fieldwork in 2015, I participated in an Odori park picnic with some members from the Sapporo Ainu community. The focus of this picnic was an enjoyable interaction and cultural exchange session between the Ainu community and a mix of local and international people living in Sapporo. Under the gaze of people walking through the park, we shared songs and dances particular to our diverse cultures, with the bulk of the intimate performance from the Ainu contingent. To know what they are seeing, Wajins (ethnic Japanese) need to be somewhat familiar with Ainu culture to understand the bare context of our interactions. As such, this is an intimate production of a community visibly "camouflaged" within a public, everyday space to be seen as existing. This activity refuses the politics of seeing and not seeing the Ainu by challenging the settler gaze through the everyday cultural production and resilience of the Ainu.

2019年度

第１回 (2019. 4. 18)

「Indigenous Literatures from North America : Innu and Inuit, Ethical Principles」.

Daniel Chartier（ケベック大学・モントリオール校）

第２回(2019.10.3)

院生発表会

研究発表１　Indigenous Peoples'use of media as a form of self-representation : analysis of Japanese government and Ainu discourses relating to the issue of Ainu ancestral remains repatriation

Ashleigh Dollin（教育学院博士前期課程）

研究発表２　Discourse of Silencing in the Context of the 150th Anniversary of the Naming of Hokkaido : Representation of Ainu-Wajin Relations in the Television Drama "Eternal Nispa, the Man Who Named Hokkaido, Matsuura Takeshiro"

Tatsiana Tsagelnik（教育学院博士後期課程）

第３回(2019. 12.6)

講演１　「ビザなし交流：構造・課題・メディア」

ゲオルギー・ブンティロフ（メディア・コミュニケーション研究院）

講演２　「オーストラリア遠隔地先住民コミュニティにおける保護者の教育観―『島に生きる』ひとびとの学校選択から考える」

青木麻衣子（高等教育機構）

第４回(2020. 2.3)

講演「トランプの時代におけるアメリカ女性運動とLGBTQの関係をめぐって」

兼子　歩（明治大学政治経済学部）

ハンドアウト

2016 年 11 月　ドナルド・トランプ（共和党）の大統領選勝利

2017 年 1 月　トランプ政権の発足 … ジェンダー／セクシュアリティをめぐる方向性は？

・プロライフの立場の明確化

・オバマ政権による LGBTQ の権利保護政策の撤回

・2 名の保守派法律家の最高裁判所判事任命

↑

抗議運動の活発化

2017 年 1 月～　「女性のワシントン大行進(Women’s March on Washington, WMW)」

→ フェミニズムとトランスジェンダー主義のあいだの緊張を露呈？

【 トランプ政権と反トランスジェンダー 】

トランプ政権の方針：LGBTQ の公民権擁護を否定する

→ 特にトランスジェンダーに対する否定的な姿勢が顕著

・生物学的性差の絶対性を強調

・セックス＝生物学的性差／ジェンダー＝社会的性差・構築物の二元論と合致

↑

ポスト公民権改革時代の差別言説：生得的で固定的な属性 ⇔ 選択可能なステータス

e.g. 反同性愛団体による同性婚否定論 … 性的指向＝選択

同性愛権利運動の主張 … 性的指向≒生得的固定的属性

→ 権利保護の前提＝集団としての不変・生得的な属性？

（ジェンダー／セクシュアリティにおける選択の自由ではなく？）

【 新しい女性運動の理想と現実①　大行進とインターセクショナリティ 】

2016 年大統領戦でのトランプの勝利 … 衝撃を与える

→ 女性運動の再活性化の契機に

・2017 年 1 月　WMW … 首都に 50 万人以上の参加者を動員

・“feminism” “patriarchy”が 2017 年のキーワードに

・#MeToo 運動の勃興

・2017～2018 年選挙における有権者登録・投票キャンペーンの活発化

↑

運動の「成功」の鍵となる概念 … インターセクショナリティ(intersectionality)

・非白人女性アクティビストを共同議長に招く

・インターセクショナルなアジェンダを掲げる

→ 警察暴力と大量収監、労働運動、先住民運動、LGBTQ の権利…＝「女性」の権利

【 新しい女性運動の理想と現実② 正義のための闘いの主体は誰なのか 】

新しい女性運動 …「女性」の定義をめぐる緊張を引き起こす

１）WMW と「プッシーハット・プロジェクト」

→ 女性の団結とトランプへの抗議を表明する

・トランプの“grab them by the pussy”への意趣返し＋女性器へのスティグマの打破

・ピンク＝女性的な色、同じ色・形の帽子を通じた女性の「想像の共同体」

・クラフティズム／クラフトフェミニズム(craftism/craft feminism)の実践

・ピンク＝弱さのステレオタイプを転覆する試み

→ トランスジェンダーand/or 非白人女性活動家・ブロガーらの批判を招く

「女性」の定義を生物学的差異(sex)によって定義？

画一化・同一性を志向するプッシーハット ⇔ 個別性を表現するジン(zine)など

２）性暴力の被害者／性的抗議運動の主体としての「女性」

・#MeToo をめぐる格差：被害者／告発者としての「女性」定義

→ トランスジェンダーの性暴力被害の不可視化・周縁化

・2019 年 5 月 アリッサ・ミラノ(Alyssa Milano)のセックスストライキの呼びかけ

→ 抵抗の主体たる「女性」＝異性愛シスジェンダー女性？

↑

運動参加者、「フェミニスト」の多くも、セックス／ジェンダーの二項対立性を前提？

→「女性」を主体として想定する＝セックスで規定されたカテゴリー

【 TERF という問題 】

2018 年 1 月の WMW … 反トランス女性の参加が話題に

→ TERF(Trans-exclusive radical feminist)という問題

1960～70 年代　　第二波フェミニズム … トランスジェンダーとは非友好的

1990 年代～　　トランスジェンダー権利運動の勃興

近年では…　　フェミニストの多数派はトランス権利擁護派、TERFs は少数派

TERFs の主張は？

・トランス女性は出生時に男性とされる＝男性特権を永久に保持？

・女性として生まれない限り「女性であること」は経験できない？
・MtF/FtM トランスジェンダーは家父長的体制を再生産？
規範的なジェンダー二元論そのものを否定せず、順応している存在？
トランスセクシュアル＝医療的家父長制に従属？

↑

TERF の主張の前提 … セックス＝固定性・不変性／ジェンダー＝選択的と捉える
→ トランプ政権の反トランスとの親和性？
フェミニズムの主体はセックスとしての「女性」
→ プッシーハット・プロジェクトとの親和性？
ジェンダー＝「個人」の属性／所有物(property)
→ トランスジェンダー主義の一部論者との親和性？

↑

セックス／ジェンダーを権力関係としてとらえる視点が必要
→ 特定ジェンダー規範の支配への従属に対する異議申し立て
同一性よりも共通性に基づいた連帯

第５回 (2020.3.2)
「来たるべき多言語・多文化環境を見据えて」
講演１　「ヨーロッパにおける包摂型言語教育の考え方」
西山教行（京都大学大学院人間・環境学研究科）
講演２　「多元社会で共に暮らす　–カナダ，バンクーバーを事例として–」
ダニエル・ムーア（サイモン・フレイザー大学）

要約　西山教行
この報告では外国語教育から言語教育への展開を探り，欧州評議会の提唱する包摂型言語教育の特徴を論じた。

移民の子どもたちや少数言語話者など社会的弱者と呼ばれる人々を包摂する社会を築くためには，どのような言語教育を学校教育のなかで進めていく必要があるのか。欧州評議会は現在この課題を中心とする言語教育政策を展開している。『カリキュラム策定ならびに教員養成ガイド–すべての教科教育の持つ言語的側面について』は 2015 年に欧州評議会が公開した資料で，2001 年の『ヨーロッパ言語共通枠』移行，精力的に進めてきた言語教育政策研究のほぼ最終段階に位置づけられる研究であり，包摂型言語教育の指針を示している。

『ヨーロッパ言語共通枠』が提起した言語教育政策はあくまでも外国語教育に特化したもので，国語教育や第二言語教育，さらに教科教育のなかでの言語の役割などに注目したものではなかった。しかしながら 21 世紀に入ってからの国際社会の大きな変動のなかで，また『ヨーロッパ言語共通枠』が提起した外国語教育における横断性という考え方を受けて，言語教育は変

化し，外国語教育の枠組みを越えようとしている。『ヨーロッパ言語共通枠』の場合，この「横断性」はヨーロッパ諸国の教育制度や教育課程や，また個別言語を横断する指標としてあらわれた。

要約　ダニエル・ムーア

カナダ西部の大都市バンクーバー市の人口は250万人を数える。カナダでは，トロントに続いて，人種の混交が目立つ都市である。英語とフランス語がカナダの2つの公用語であるのに，2016年の国勢調査では，バンクーバーの人口の41.8%以上が家族間ではそれ以外の言語を話すことが分かっている。移民の言語の中でも中国系の言語が多数を占め，45%が中国語が家族で使用する言語であると報告している（北京語が22%，広東語が21%，その他の中国語が2%）。次に家族間で最もよく使用される言語としてパンジャブ語（17%），韓国語（6%），タガログ語（5%），ペルシア語（4%），スペイン語（3%），ベトナム語（2%）と続く（統計カナダ，2016年）。特定のグループの空間的定住のディアスポラ的な性質により，言語的および文化的な島の形成も促進される。一部の地区では，多くの場合非常に緊密な社会的ネットワークの周りで，地元の人口の85%以上が使用言語として移民の言語を話している。バンクーバーが位置するブリティッシュ・コロンビア州にはカナダで最も多くの現地グループと言語（独自の伝統，30の言語，60以上の方言を持つ196の異なるグループ）があり，カナダの真実和解政策は幼稚園から大学までのすべての人々の/ためのアイデンティティ部分に敬意を表し，それを確立しようとしている（TRC 2015）。

その結果，バンクーバーでは家族社会以外の言語または文化システムで教育を受けた若い生徒の数が増え続けており，教育機関とその当事者たちは新たな記述，計画，教育の課題が投げかけられている（Marshall et他，出版中）。そのため，特に教育機関，現地のグループ，博物館，コミュニティセンターとの協働を通じて，言語政策，教育，コミュニティエンゲージメントの優先的な戦略的課題として，多様性の管理と他者に対する理解が浮上している（Li＆Moore，2019; Moore，印刷中）。

この発表では次の 3 点を扱った。

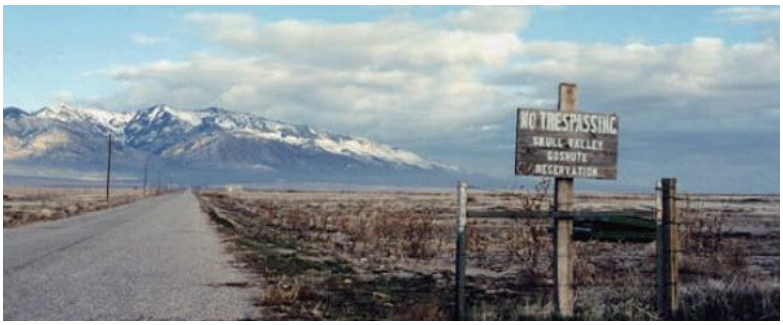
（1）英語とともにカナダの 2 つの公用語のうちの 1 つであるフランス語が，フランス語話者が 1%未満で，非常におおまかにいって少数派であること，（2）この非常に特殊な状況におけるカナダの先住民の立場について，　（3）カナダの多言語・多文化社会を評価する観点から，「共に生きること」の促進を目的としたいくつかの社会政治的および教育的戦略について。

セトラー・コロニアリズムの地理空間

アメリカ先住民の身体と環境をめぐる諸問題

講師：**石山徳子**（明治大学政治経済学部教授）
コメンテーター：**秋辺日出男**（民芸ショップ「デボの店」経営・阿寒アイヌ工芸協同組合専務理事・阿寒観光協会理事）
八重樫志仁（Rehe Isam 代表・浦河町アイヌ生活相談員）

日時：2017 年 11 月 10 日（金）16:30～18:10、11 日（土）9:15～11:10
場所：北海道大学メディア・コミュニケーション研究院　608 号教室



【プログラム】
11 月 10 日（金）
16:30～17:30 講演「セトラー・コロニアリズムの地理空間　アメリカ先住民の身体と環境をめぐる諸問題」
17:30～17:40 休憩
17:40～18:10 質問・ディスカッション

11 月 11 日（土）
9:15～9:35: 八重樫志仁氏による石山徳子氏講演に対するコメント・質問
9:35～10:05: 石山徳子氏による回答と全員によるディスカッション
10:05～10:20: 休憩
10:20～10:40: 秋辺日出男氏による石山徳子氏講演に対するコメント・質問
10:40～11:10: 石山徳子氏による回答と全員によるディスカッション

問合せ先：北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院　土田映子（tsuchida@imc.hokudai.ac.jp）
photo credit: http://clui.org/ludb/site/skull-valley-indian-reservation

北海道大学メディア・コミュニケーション研究院　多元文化教育論講座内共同研究
「多文化世界におけるアイデンティティと文化的アイコン：民族・言語・国民を中心に」第 2 回公開研究会

古写真に見るアイヌ民族の表象

―函館アイヌ学校とセントルイス万国博覧会を事例として―

講師：**田辺陽子**（ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン教育研究所（IOE）博士候補生）
日時：2018 年 2 月 23 日（金）16:00～17:30
場所：北海道大学メディア・コミュニケーション研究院　101 号教室

本講演では、1）英国聖公会宣教協会（CMS）のアーカイブス、2）1904年のセントルイス万国博覧会で撮影されたアイヌ民族の写真史料を基に、当時の先住民族アイヌの表象に着目する。CMS所属の宣教師は、「アイヌの父」として知られるジョン・バチェラーをはじめとして、明治時代から北海道内で様々な伝道及び教育・医療活動を行っていた。その中でも、CMSが函館に設立した寄宿制の「アイヌ学校」は、CMS本部の海外宣教方針や日本の先住民政策などに左右されながらも特色あるカリキュラムを組み、アイヌ文化伝承においても一定の成果を上げた。本講演では、北海道在住の英国人宣教師がCMS本部に送った当時の写真史料を紹介し、時代背景や写真の意図を読み解くことで、英国人の「アイヌ像」について考察する。次に講演後半では、アイヌ民族の代表9名が参加したセントルイス万国博覧会を取り上げる。当博覧会においては、当時趨勢であった社会進化論と帝国主義的な「支配・被支配」構造を象徴するように、世界各地から呼び寄せた先住民の生活を来場者に見せるという「ヒト」の展示が行われた。しかしその一方で、当時の写真や記録を紐解けば、アイヌの参加者が単に珍しい被写体、展示対象として存在していたわけではないことが明らかになってくる。そこで、現地の新聞や現存する写真史料を活用し、当時の米国におけるアイヌ民族の表象とその特徴、また先住民族に対する当時の言説を理解する。

プログラム
16:00～17:00 田辺陽子氏による講演
17:00～17:10 休憩
17:10～17:30　質疑応答・ディスカッション

講師紹介
ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン教育研究所（IOE）博士候補生。専門は少数・先住民族の言語及び教育政策。編著書に『聖路易通信―1904 年セントルイス万国博覧会「アイヌ村」からの便り』（かまくら春秋社、2016 年）、『英国聖公会宣教協会の日本伝道と函館アイヌ学校―英国人女性エディス・ベアリング＝グールドが見た明治日本―』（春風社、2018年）。

参加費無料　事前申し込み不要
問合せ先：北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院　土田映子（tsuchida@imc.hokudai.ac.jp）

北海道大学メディア・コミュニケーション研究院　多元文化教育論講座内共同研究
「多文化世界におけるアイデンティティと文化的アイコン：民族・言語・国民を中心に」
2018 年度第 1 回公開研究会

先住民・難民に対するまなざしの変化と実際

本研究会は、グローバル化・多文化化の進む現代社会において、メディアや大衆文化、公教育が伝達する「他者」「自己」イメージの形成と拡散、受容のプロセスについて検討するものです。今年度第 1 回目の研究会は、文学および移民・難民受け入れのシェルターでの活動という二つの異なる分野での研究・実践から、先住民・難民に対する人々のまなざしの変化と実際について考えます。

日時：2018 年 7 月 13 日（金）16:30-18:30

場所：北海道大学メディア・コミュニケーション研究院
608 教室（最寄駅：地下鉄南北線　北 18 条駅）

16:00（受付開始）　16:30～18:30

講演①

「和解時代」のオーストラリア文学ー入植 200 周年以降の先住民表象

一谷 智子 氏（西南学院大学）

講演②

On the Front Line of the Migration Crisis:
Faith-Based Support for Asylum Seekers in Manchester, UK

Dr. Mark Justin Rainey (Research Fellow, School of Geography, Queen Mary, University College of London)

※講演②は、英語による講演です。通訳は入りません。

※参加無料・事前申し込み不要

【お問い合わせ】 国際連携機構国際教育研究センター　青木麻衣子
（maoki@oia.hokudai.ac.jp）

先住民族エンパワーメントと
先住民族政策の変容のための世論形成
—先住民族のイメージ操作と他集団との連携—

主催：北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院　多元文化教育論講座内共同研究「多文化世界におけるアイデンティティと文化的アイコン：民族・言語・国民を中心に」、北海道における先住民族の「知」の活用に関する研究プロジェクト

日程：2019 年 2 月 3 日(日)　9:30～12:00
会場：北海道大学メディア・コミュニケーション棟 105 号室

話題 1:「カナダ先住民族教育における脱植民地戦略」（20 分）
広瀬健一郎先生（鹿児島純心女子大学国際人間学部 准教授）

話題 2:「文化実践を通じた民族の誇りの復興」（40 分、逐次通訳）
ナロマ・ライリー氏（マオリパフォーマンスグループ「ナ・ハウ・エ・ファ」代表、東北大学総務企画部広報室国際広報センター勤務）
ポール・マオアテ氏（クック・アイランドマオリ民族、「ナ・ハウ・エ・ファ」メンバー、玉川学園 IB[国際バカロレア]プログラム教諭）

アイヌ民族コメンテーターによるコメント（各 15 分、計 45 分）
葛野次雄氏（文化伝承者・「コタンの会」副代表）
八重樫志仁氏（Rehe Isam 代表・浦河町アイヌ生活相談員）
秋辺日出男氏（民芸ショップ「デボの店」経営・阿寒アイヌ工芸協同組合専務理事・阿寒観光協会理事）

総合討論：25 分

日本の入植型植民社会を揺らす先住民族：日常と非日常の視点から

アン・ロスリン, 上海ニューヨーク大学

日程：2019年3月8日(金)
16:30〜18:00
会場：北海道大学メディア・コミュニケーション棟105号室

歴史学者WOLFE(2006)によると、入植型植民地（SETTLER COLONIALISM）の構造は原住している民族を消し、入植社会を築くことである。本研究会はアイヌ表象の存在や欠如の観点から、札幌という空間を再検討する。更に、先住民研究の思想論や研究方法はいかに発表者の研究分野として位置づいている人類学を変えたかも探る。

主催：北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院 多元文化教育論講座内共同研究「多文化世界におけるアイデンティティと文化的アイコン：民族・言語・国民を中心に」、北海道における先住民族の「知」の活用に関する研究プロジェクト

Indigenous Literatures from North America: Innu and Inuit. Ethical Principles.

Daniel Chartier
Université du Québec à Montréal

2019年4月18日（木）16:30～
人文･社会科学総合教育研究棟（W棟）410

使用言語：English　※日本語通訳付き
事前申込不要

主催：北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院　多元文化教育論講座内共同研究「多文化世界にお　けるアイデンティティと文化的アイコン：民族・言語・国民を中心に」、北海道における先住民族の「知」の活用　に関する研究プロジェクト

お問合せ先：Jeffry Gayman jeffry.gayman@imc.hokudai.ac.jp

2019 年度メディア・コミュニケーション研究院共同研究補助金による共同研究
多元文化教育論分野・教育学院多元文化教育論講座

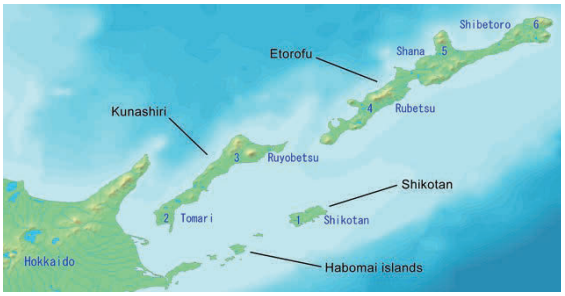
「多文化世界におけるアイデンティティと文化的アイコン：民族・言語・国民を中心に」主催研究会

日時：2019 年 12 月 16 日（月）16:30～18:30
場所：メディア・コミュニケーション研究院 608 教室

講師：
ブンティロフ　ゲオルギー助教
講演題目：ビザなし交流：構造・課題・メディア

青木麻衣子准教授
講演題目：オーストラリア遠隔地先住民コミュニティにおける保護者の教育観—「島に生きる」ひとびとの学校選択から考える

今回は統一テーマは設けません。青木麻衣子先生（国際連携機構）にはオーストラリアでの在外研究の成果をご報告いただき、また今年度新任のブンティロフ先生には北方領土とのビザなし交流について現地調査をもとにご報告いただきます。多くの皆様のご参加をお待ちしております。



問い合わせ先：土田映子 tsuchida@imc.hokudai.ac.jp

メディア・コミュニケーション研究院共同研究補助金による共同研究
多元文化教育論分野・教育学院多元文化教育論講座
「多文化世界におけるアイデンティティと文化的アイコン：民族・言語・国民を中心に」
2019 年度第 2 回研究会

トランプの時代におけるアメリカ女性運動と LGBTQ の関係をめぐって

日時：2020 年 2 月 3 日（月）16:30～18:30
場所：メディア・コミュニケーション研究院 307 教室

講師：兼子　歩 氏（明治大学政治経済学部専任講師）

20 世紀アメリカ合衆国の社会変動におけるジェンダー・セクシュアリティおよび人種編制の変容を専門とする。北海道大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学。著作に『「ヘイト」の時代のアメリカ史』（共著、彩流社、2017 年）、「アメリカ売買春史の展開：革新主義期を中心に」『歴史学研究』第 925 号（2014 年）、『南北戦争のなかの女と男：愛国心と記憶のジェンダー史』（訳書、岩波書店、2016 年）などがある。

コメンテーター：
瀬名波　栄潤 氏（北海道大学大学院文学研究院教授）

英文学博士（Ph. D）。米サウス・カロライナ大学客員助教授を経て、1996 年に北海道大学文学部着任。2013 年より現職。
ジェンダー・セクシュアリティの視点から英文学作品や映画を研究教育。女性研究や男性性研究に加え、LGBT+研究及びクイア理論に関心がある。
2015 年度北海道大学教育総長賞（優秀賞）受賞、18 年度北海道大学エクセレント・ティーチャー選出。

予約の必要はありません。多くの皆様のご参加をお待ちしております。

問い合わせ先：土田映子 tsuchida@imc.hokudai.ac.jp

北海道大学メディア・コミュニケーション研究院 多元文化教育論講座内共同研究
「多文化世界におけるアイデンティティと文化的アイコン：民族・言語・国民を中心に」
2019 年度第 5 回公開研究会

「来たるべき多言語・多文化環境を見据えて」

グローバル化に伴い，多言語・多文化になりつつある社会で，

いかに共に生きるかを考えます。

多くの皆さまのご参加をお待ちしております。

日時：2020 年 3 月 2 日（月）　9:00-12:00
場所：北海道大学メディア・コミュニケーション棟 105 号室

講演 1 ：西山教行氏（京都大学大学院人間・環境学研究科教授）
「ヨーロッパにおける包摂型言語教育の考え方」
講演2：ダニエル・ムーア氏（カナダ・フレイザー大学教授，京都大学客員教授）
「多元社会で共に暮らす–カナダ，バンクーバーを事例として–」
＊講演2はフランス語による講演，通訳つき。質疑応答は英語でもできます。

参加無料・事前申込み不要
【お問い合わせ】　北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院　長野　督（koh@imc.hokudai.ac.jp）